

特定研究「心身の健康に対して環境が及ぼす影響に関する総合的研究」報告書 平成7年3月。

環境の身体に及ぼす影響について

一口に環境といっても、その中には自然の環境もあり、人為的な環境もある。広い意味での文化的小よび社会的な環境が後者に属している。

しかし両者は、必ずしも別個に作用するとは限らない。しばしば両者は相互に重なり合いながら影響を与えと考えられる。

また「身体に対する影響」というばあいにも、環境が精神面に影響を及ぼすばあいと、生体そのものに対する影響とに大別できるであろう。その中間を為すのは、精神面に及ぼされた影響に基づいて二次的に生じた生理的な影響である。その典型的なものとしては、例えば心身症、ノイローゼの類が挙げられる。これについては現在さまざまな分野と角度からの研究が行われているのは、^{つと}夙に周知のことに属する。

自然環境がそれ自体として身体に影響を与える例としては、地球の緯度と皮膚の色が挙げられよう。また高緯度地方の住民が、低温に適応して高く狭い鼻を持ち、そのために特異は容貌をもつというのも、本来は自然環境独自の影響であることは間違いない。そしてこのようなものは、一旦それが遺伝的な獲得形質となれば、生物学的な条件となる。

しかし、生物学的・遺伝的な条件と考えられているものが、必ずしもすべて自然環境にのみ影響を受けているということは、できない。よく知られている例として、例えばハワイ在住の日本人2世、3世と世代を経るに従って、著しい四肢の発達を見るという、シャピロの報告がある。これは生活様式等の変化によるものとして説明されるものであり、生物学的な条件と並んで、人為的な、文化・社会的な条件の現象が認められる。一般に生育期における栄養条件、生活条件の好悪が、気候・風土のような自然条件とならんで、身長の高低を生じることが認められ、アメリカ、ハワイ、ブラジル等の在外邦人の方が身長が高く、山地の住民よりも、平地の住民の方が身長が高いことのほか、農民、労働者より学生・知識

人の方が、概して身長が高いなどというように、社会階層との関連の存在が認められている。

太平洋戦争前後に成長期を体験した日本人の身長が概ね低く、そしてその後の日本人の身長が著しく大きくなって来つつあるのも、このような条件の結果であろう。特に戦後の時期においては、欧米風の生活様式の拡大がこれに与って力があつたことは、さまざまな指摘がある。

しかしこのような文化的・社会的条件は、純粋なものではなく、文化的・社会的な条件が、一定の人為的な自然条件を産みだし、その結果身体的な影響を生ぜしめたものであって、いわば自然条件を媒介にした文化的・社会的条件であるといふことができるのであり、この意味でこのような条件は、純粋な文化的・社会的条件というよりは、自然条件と文化的・社会的条件の中間にあるものであると考えられる。

それでは、身体そのものに影響を与える純粋な文化的・社会的条件とはなにか、またそのような条件は、果たして存在するか、というのがここで問題になるのであろう。これについては、管見の限りでは未だ客観的な立証はできておらず、今後に残されている大きな問題であると思われるが、そのようなものとして考えられる有力なものとして、象徴的、美的な価値乃至観念がある。

例えば日本の社会の中には、欧米のものを良しとする風潮は、未だ強い意識として存在すると考えられるが、上述の身長の問題、あるいは立体的な風貌が、より良いもの、より美的なものとして、価値づけられる傾向が顕著である。近年若者の身長および容貌に、このような特徴を帯びる個体の数が著しく増加しているのは、このためではないかと考えられるのである。そうとすれば、これらは純粋に観念的なものが、身体に影響を及ぼした結果であるとみることができよう。より美的なものへの不断の願望、またそれを美的なものとする純粋に文化的な環境の存在である。

病的なものとしては、現在しばしば大きく取り上げられて社会的な問題にさえなっている、若い女性達の痩身願望及びそれに伴う食物の過度の節制（所謂ダイエット）、さらにそれが嵩じた拒食症なども、これに分類されるかも知れない。

逆にカラハリ砂漠に住むコイサノイドに属するピグミー族とコイ族とを比較すれば、人種形質としては両者極めて近縁であるにもかかわらず、コイ族の主として女子のばあい、脂臀 (steatopygia) とよばれる巨大な臀部を特徴としている。脂臀は四季の特定の時期に強制的に多量の食料を摂取すると大きくなり、その他の時期には小さくなるという観察もあるといわれているが、彼らの社会において臀部が大きいことが美的であるという観念があることもしばしば指摘されていることから、これについても上述した美的観念との相関関係の存在が疑われる。

このような象徴的、美的その他の価値観といった、観念的なものの身体に及ぼす影響については、その有無をも含めて、今後研究する必要がある。

『類型学序説 — ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』1995年10月31日初版第一刷。

類型学序説

まえがき

はじめてロシア語を学びはじめたとき、ロシア語がそれまで学んできた英語などと非常に異なった「くせ」をもっていることに、とまどいを感じたことを、覚えている。たとえば英語であれほど自由にまた便利に用いられていた have 動詞がほとんど用いられないで、be 動詞にあたるものがその代わりをしていることや、名詞に「もの」であるか、それ以外のものであるかという区別があることなども、その一つであった。そのうちに、その中にはたとえば所有の表現とか、「～が好きだ」という表現のように、日本語と共通する「くせ」や、be afraid とか full とかのように、英語でも属格をとる語彙がよく似た意味をもっているというように、英語と共通する「くせ」があることもなんとなくわかってきた。しかしこれらはあくまで「くせ」であるから、なぜそのような現象が起こるのかを問うことは不可能でもあるし、また意味のないことであると思われた。